

ニッケイ俳壇

(866)

星野 瞳 選

新津 稲鷗

白き月浮べ広野は草の春

アーランサ

鳴きそらう夜蟬に今宵の月遅し

白蝶の黄色い卵貝割菜

牧の沼に映りて今朝のイペーの白

菜飯焚き二人の生活始めけり

セーラードスクリスタイ

リトロールはいつも風ある海は初夏

アスパルゴ初芽を食べて移民健

穴を出でし蛇野ねずみに頭を上げし

姫ましまき恋に夢中のジヨンバウロ

ボンボランガ

青木 駿浪

桶口玄海児

清貧に生きて悔なし青簾

雲の峰マンチケーラのそびえけり

小康のづづく病妻ヒヤセンス

夏草や篤学の友今朝逝ける

大河に添う一望の麦の秋

カンドスドジョルドン

鈴木 静林

春の牧意地悪る自のつき虎牛生

ジョイダンガイレ

筒井あつし

一通の文が宝や念腹忌

孫弟子を自負してなる念腹忌

本句の道究むは難し念腹忌

ニッケイ歌壇

(501)

上妻 博彦 選

春愁や死のふち一度もさ迷いて

サンジゼドスカノボス

大月 春水

盆の花こぼれず朝の露ふくむ

西山ひろ子

墓地で会うお盆は草葉久しぶり

天方の陽差しの中や百千鳥

久方の陽差しの中や百千鳥

墓地で会うお盆は草葉久しぶり

特別寄稿

1946年、大飛蝗群の来襲

来年はパ国日本人移住80周年

パラグアイ

坂本邦雄



1887年にドイツライプツィヒで描かれた飛蝗の絵([Public domain], via Wikimedia Commons)

早いもので来年(2016)は、私が育った戦前のラ・コルメナ植民地の創設80周年で、即ち戦後に続く全パラグアイ日本人移住80周年記念の誠にめでたい年でもある。そこで、今回はパラグアイ日本人移住「桑寿」の年にちなんで、はばかりながら昔のラ・コルメナ時代の思い出を綴つて見たいと思う。

いに地上に降りて、行く先々の作物や木々の全ての緑は見事にバリバリと食い荒らされて丸坊主にななり、農家の被害は甚大を極めた。

サバクバッタの蝗害の話を旧約聖書の「出エジプト記」にもあって、産卵期に飛蝗群が地中に産む卵は、2~3日後

も悪質だとされる。サバクバッタの蝗害の話を「食害の大飢饉」に起きたのである。

飛蝗群の来襲は、1946年の8月から11月にかけて産卵期のものと、

飛蝗群を見ると、大

のせいでは、戦争が中断されたり、実際にバッタが掘つて落とし入れ、埋没する方法などを施したが、余り成果はなかった。

それで、パラグアイの政府の支援もあつて、数台の火炎放射器と燃料

で、バッタへ軽くして行つた。

この気概が、その頃はラ・コルメナに見切りをつけアルゼンチンやブ

ラジルへ転じて行つた多くの駕耕者と異なり、ド根性」で

この気概が、その頃はラ・コルメナに見切りをつけアルゼンチンやブ

ラジルへ軽くして行つた多くの駕耕者と異なり、ド根性」で

この気概が、その頃はラ・コルメナに見切りをつけアルゼンチンやブ

